

心づかい
心くばり

上卷

塩月弥栄子

大活

ーズ

心づかい
心くばり

上卷

塩月弥栄子

心づかい心くばり 上

(大活字本シリーズ)

昭和60年10月10日発行 (限定部数500部)

底 本 文化出版局刊「心づかい心くばり」

定 価 3,100円

著 者 塩月弥栄子

発行者 並木 則康

発行所 社会福祉法人 埼玉福祉会



〒352 埼玉県新座市堀ノ内3-7-31

電話 0484-81-2181

振替 東京 6 - 24404

印刷所 社会福祉法人 埼玉福祉会 新座福祉工場
製本 法 人

心づかい心くばり

上

装 装
画 幀
川 関
崎 昭
春 夫
彦

目次

第一章 ひかり

父からの電話	九
わが母のおしえ	二七
お茶のたしなみ——入門の方へ	三六
お茶に想う	四二
お茶の稽古	四八
茶室のひるね	五五

一滴のかおり	………	六七
「女らしさ」ということ	………	七五
女の幸せ	………	八五
心のおしゃれ	………	九四
心のささえ	………	九九
乏しさと豊かさと	………	一〇八
挨拶ことば	………	一二六
この一瞬をほのぼのと	………	一二四

第二章 かおり

結びやなぎ・・・・・・・・・・・・・一三五

扇・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一四一

こぼれ梅・・・・・・・・・・・・・・・・・・一四七

菜の花供養・・・・・・・・・・・・・・・・一五三

音・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一五九

春はなびらの・・・・・・・・・・・・・・一七〇

「侘び」と「やつし」・・・・・・・・・・一七七

祇園・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一八三

花もちりテットン・・・・・・・・・・・・・一八八

今日庵初見	一九三
露をうつ	二〇六
朝顔の茶	二二一
一本の野菊	二二六
草のなごり	二三三
炉	二三六
秋ざれの山居にて	二三五
けずり花	二四四

第一章

ひかり



父からの電話

私の父、裏千家先代の家元淡々斎が、北海道阿寒湖の畔りで急逝したのは昭和三十九年九月七日の昼のこと、七十一歳でした。それはちょうど月曜日で、私がレギュラー出演していたNHKテレビのクイズ番組「私の秘密」の生放送の日で、私は涙をこらえて出演したのです。まだ父の死は、世間に公表されてはいませんでした。内々もう知っていた方は、あるいは心ないと思われたかもしれませんが。しか

し、生前父はどんなにこの番組を愛し、楽しんでいてくれたことか。そのなつかしい日々を思い、遠く北海道から、特別のはからいで京都の自宅へ運ばれた父のなきがらのほうを心で拝みながら、せいっぱいお手向けの心をこめてつとめたあの夕べのことは、おそらく一生の間、忘れられぬ思い出となることでしょう。

父は「私の秘密」の熱心なファンでした。ときどき電話をかけてきて、「どうもこんどはこんな問題が出そうやなァ」とヒントを与えてくれたこともしばしばです。そして番組が終わると「今晚はええ調子やったぞ」とか、「さっぱりあきまへなんだな」とか、電話で批評してくれます。よほどのことのないかぎりには、父も母もこの番組だけは欠かさなかったようで、私も毎週ブラウン管を通して、両親に元気な顔

を見てもらえらと思うと張り合いがあったのでした。

この番組にはクイズのあとに必ずゲストの「ご対面」というのがありました。それは本人もすっかり忘れているような遠い昔、何かのご縁で袖触れあった人を探してきて対面させ、その人を思い出させるという趣向ですが、あるとき父がゲストになって、ご対面をしたことがあります。

それは父がまだ二十代のころの話でした。神戸へ向かう途中、京都駅で、いま発車しようとする汽車にあわてて飛び乗ったのはいいのですが、片方の草履をホームとタラップのすき間から下に落としてしまいました。するとその瞬間、ホームに立っていた妙齡のご婦人が、さっと自分の草履を脱ぐが早いのか、走りだした列車にかけより、左右

そろえて素早く「これをどうぞ」と、父の手に差し出したのです。それを受けとった父は「ありがとう」と、残る片方の自分の草履を、もうすっかり速度を増していた列車からポイと脱ぎ捨てました。はだしになったお対^{あいて}手にそろえてはいてもらうためでした。そのご婦人が渡してくださった女草履は、幸い鼻緒の色が白っぽかったので、男がはいてもべつに不自然ではなかったということです。

とっさの機転と親切、そしてそれに応える臨機^{りんき}の処置^{しよし}の話柄に、折りにふれて父はよく私たち五人の子どもにこの話をきかせていました。

その日のご対面には、この草履の主が五十年ぶりで父の前にあらわれたのです。その方はいまは東京で旅館のおかみさんにおさまってい

られるとか伺いました。

古いお弟子さんたち、お年寄りの方からきくところでは、若いとき
の父は面長で、おもながなかなか美男だったそうです。それと同時に、いかに
も京都のぼんぼんらしく気が早く、かんしゃくもちだったという話で
すが、それがだんだんに練れて、五十歳を越してからは人に怒った顔
を見せたことがなかったといわれています。それも修養からでなく、
自然にふるまっていたいながらそうだったところに父の偉さを感じると、
父を知る方からよくきかされます。しかし、最後までせっかちな性分
はなおらなかつたとみえて、どこかへ出かけるときなど、「汽車はま
だ大丈夫ですよ」と、まわりの人がいくらいっても、「乗りおくれた
らいかん」と、早々に出かけて、いつもホームに二十分か三十分は立

ちんぼしていないと気がすまないタチでした。

いつかこのことを父に話したら、「弥栄子や、そりやせっかちやない。ワシのために見送りにくる弟子たちに失礼のないよう、ゆとりをもたせる配慮があるんや」と逆にきびしくお説教をされてしまいました。

お茶のほうにはたしかに「刻限は早目に」という教えがあります。が、それにしても娘の私としては、父が最後までせっかちのおかげか、わが家にも帰りつかずに、阿寒湖の畔りであわただしくあの世に旅出ってしまったかと思うと、父らしいなあと皮肉にも、おかしくもあり、どうにもたまらなく悲しい思いがいたします。

七月の二十四日は父の誕生日でした。例年ならば箱根に家族一同が